

第8節 時期不明の遺構

1 概要(第121図)

その他、時期不明の遺構としてA区では土坑5基(SK3・4・5・13・14)、B区では土坑1基(SK9)、C区では土坑2基(SK10・12)、道2基(SX1・3)がある。SK13・14は製炭土坑、SK3・4・5・9・10は不明土坑、SX1・3は硬化面をもつ道と考えられる。



第121図 時期不明遺構配置図

2 土坑・製炭土坑

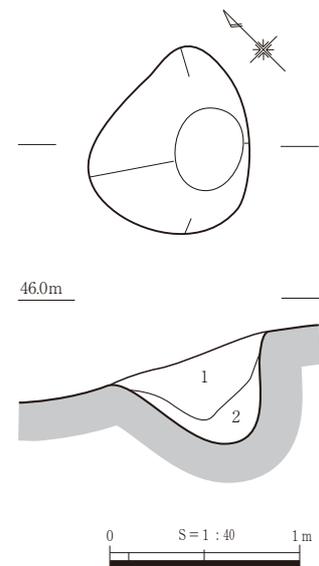
SK3 (第122図、PL.28)

A区南東調査区際のH4グリッドにあり、標高44.5~44.8mの斜面部に立地する。西側約14mにSK5、北東側約18mにはSK4がある。表土除去後のソフトローム二次堆積土中で検出した。

平面は不整楕円形を呈し、長軸0.96m、短軸0.82m、深さ最大0.61mを測る。断面は深いボウル状を呈す。

埋土は2層に分層できた。黄褐色土系の埋土がレンズ状に堆積する。

出土遺物はなく、時期、性格は不明である。



- 1 灰黄褐色～にぶい黄褐色 (10YR4/2~4/3) 白色礫・黄褐色土粒を含む。
- 2 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 黄褐色土粒多く含む。

第122図 SK3

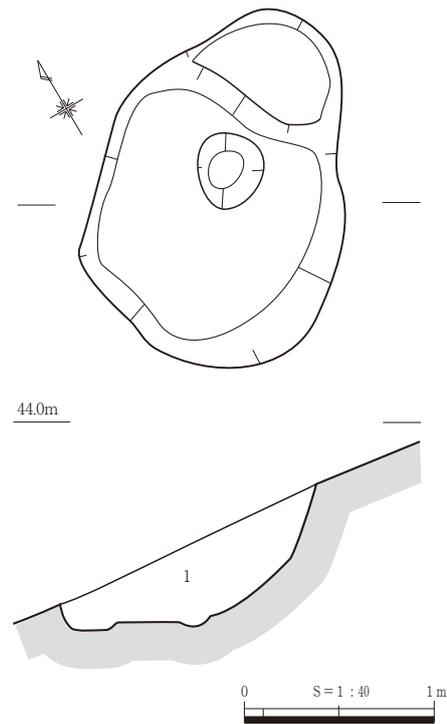
SK 4 (第123図、PL.28)

A区東調査区際のG3グリッドにあり、標高43.0~43.5mの斜面部に立地する。南西側約18mにSK3、北西側約11mにはSK13・14がある。表土除去後のソフトローム二次堆積土中で検出した。

平面は不整隅丸方形を呈し、長軸1.9m、短軸1.32m、深さ最大0.37mを測る。断面は逆台形状を呈し、底面東側にはピット状にわずかに窪む部分がある。

埋土は、上位が灰黄褐色土系で、底面付近になるにつれて徐々に黒褐色となる。

出土遺物はなく、時期、性格は不明である。



1 灰黄褐色土 (10YR4/2 上方) ~ 黒褐色土 (10YR3/2 下方) 地山礫を含む。縮まりあり。粘性ややあり。下方には黄褐色土 (地山) ブロックが混じる。

第123図 SK 4

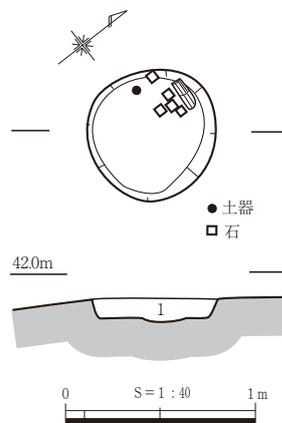
SK 5 (第124図、PL.28)

A区南側のH6グリッドにあり、標高41.8m付近の斜面部に立地する。東側約14mにはSK3がある。表土除去後のソフトローム二次堆積土中で検出した。

平面は円形を呈し、長軸0.7m、短軸0.68m、深さ最大0.15mを測る。断面は浅い逆台形状を呈し、底面は平坦である。

埋土は、木炭をわずかに含む黄褐色土の単層である。北側壁際で木炭片がまとまって出土している。

出土遺物はなく、時期は不明であるが、木炭がまとまって出土していることから、製炭土坑の可能性はある。



1 におい黄褐色土 (10YR4/3) 木炭を含み、黄褐色土粒混じる。

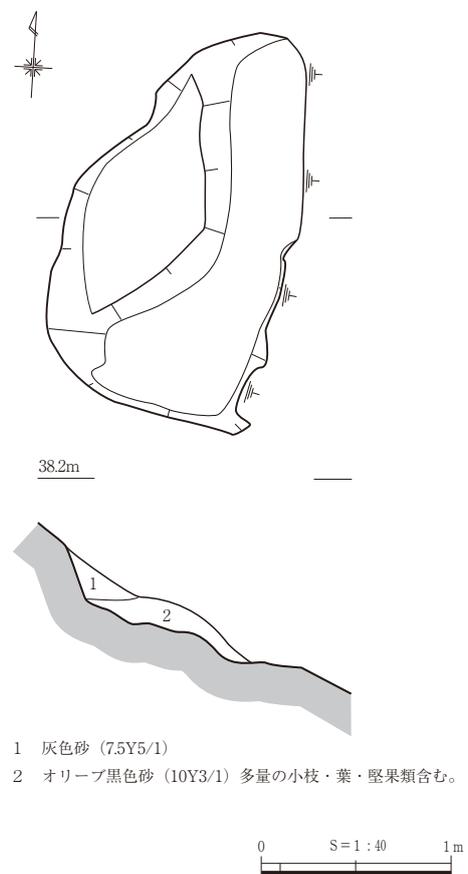
第124図 SK 5

SK 9 (第125図、PL.29)

B区とC区の境付近のG10グリッドにあり、標高37.3~37.8mの河川堆積層である砂礫層上に立地する。

遺存状態は非常に悪く、平面は半月状に検出された。本来は円形を呈すものと考えられる。長軸2.06m、短軸1.13m以上、深さ最大0.62mを測る。底面は平坦ではなく、段状となる。調査時には底面から湧水があった。

埋土のうち、上層は砂層で、底面付近は樹木の枝や葉、堅果類が堆積する。



1 灰色砂 (7.5Y5/1)
2 オリーブ黒色砂 (10Y3/1) 多量の小枝・葉・堅果類含む。

第125図 SK 9

第3章 調査成果

出土遺物はなく、時期は不明であるが、堅果類が出土することから、水辺の貯蔵穴の可能性はある。

SK10(第126図、PL.29)

C区中央南端近く、G11グリッドに位置している。段丘斜面の中腹にあたり、付近は急傾斜の斜面である。この遺構以外に、近接した遺構はなかった。検出面はハードロームの黄褐色粘土である。

町道の敷設部分で検出され、上部は削平されており、谷側の半分も浸食により失われ、全体の平面形は半円状になっている。現状で長軸1.9m、短軸0.95m、深さ0.55mである。

底面は、黄褐色シルトと頭大程度の円礫が混ざった土層である。いわゆる御来屋礫層で、掘削が困難なことから、この層で掘削を止めたと思われる。壁面は比較的掘削の容易な黄褐色粘土である。山側の壁面は底部近くが奥に抉れるようになっていたが、草木根による変改を受けて、凹凸が著しい。

埋土は3層に区分した。いずれも黒褐色の土層である。粘土質シルトからシルトあるいは粘土からなり、類似した特徴である。ほぼ水平に堆積していた。

遺物は出土せず、時期の特定は困難であるが、堆積土の状況からC区で検出された弥生や古代の遺構よりは新しい可能性が高い。急傾斜地に造られ、町道谷側の端辺に造られている立地条件からすれば、町道以前の中・近世の山道に関連して造られた遺構の可能性もあるが、堆積土の状況からみて、近現代の遺構とは考えにくい。性格は不明である。

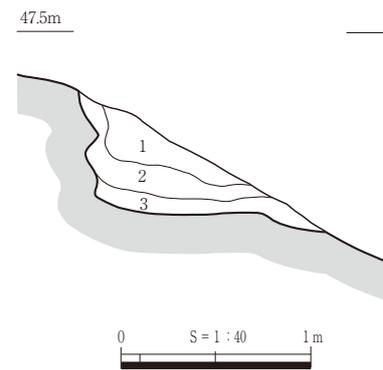
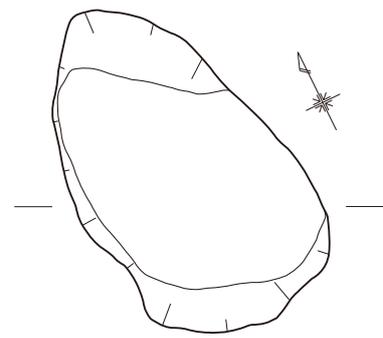
SK12(第127図、PL.29)

C区北東側のC8グリッドにあり、標高38.0~38.2mの急斜面に立地する。周囲は、飛鳥時代から奈良時代の遺構が密集する箇所である。谷堆積の暗褐色土中で検出した。

斜面下方の東側は流失しており、半月状に検出されたが、本来は円形を呈していたものと思われる。規模長軸1.18m、短軸0.6m以上、深さ最大0.15mを測る。

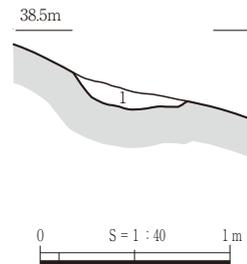
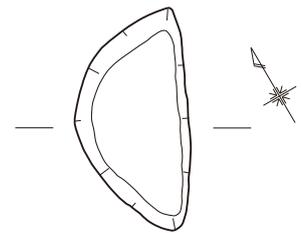
埋土は、炭化物を含む黒褐色土単層である。

出土遺物がなく、時期は不明であるが、周辺には飛鳥時代から奈良時代にかけての遺構や遺物が確認されており、この時期に属する可能性もある。性格は不明である。



- 1 黒褐色粘土質シルト (10YR3/1) 小礫凝灰岩を含む。
- 2 黒色粘土 (10YR2/1) 小礫凝灰岩を含む。
- 3 黒褐色シルト (10YR2/3) 小礫凝灰岩を含む。

第126図 SK10



- 1 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性強い。
φ 2~10mm の砂礫を少し含む。
炭化物を少し含む。

第127図 SK12

SK13(第128図、PL.29)

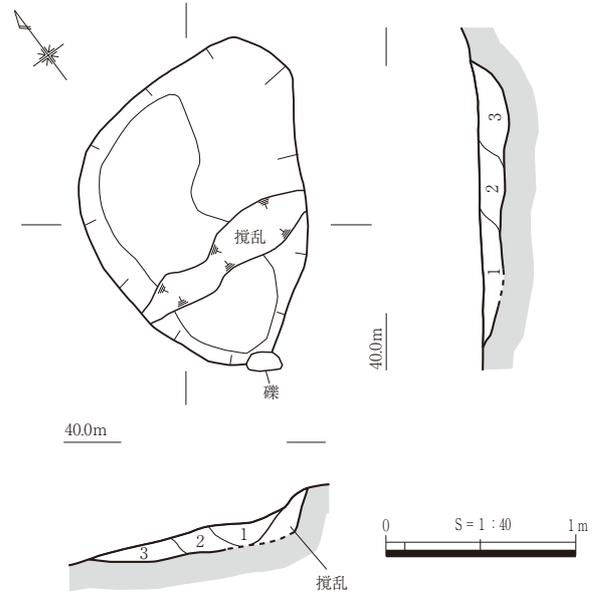
A区北西寄りのE3グリッドの中央南端付近にあり、標高39.5m付近の丘陵斜面上に位置する。すぐ北側にはSK14がある。表土除去後のソフトローム二次堆積土中で検出した。

平面形が不整な楕円形を呈する土坑で、長軸1.62m、短軸1.17m、深さ最大17cmを測る。底面は長軸方向では平坦であるが、短軸方向では地形に沿って北東側にやや傾斜する。中央より南側では、東西方向の根攪乱によって一部が壊されている。

埋土は暗褐色土や黒褐色土を主体とする3層に分けられ、自然堆積と考える。2・3層中には炭粒を多く含んでおり、特に3層で密に含んでいたが、焼土や被熱面等は確認できなかった。

時期を決定できる遺物は出土しておらず、炭粒も自然科学分析による年代測定に耐えうる資料はなく、遺構の時期は不明である。

遺構の性格は判然としないが、2・3層中より炭粒が多く出土することや周辺遺構との関係から、製炭に関わる土坑と考える。



- 1 暗褐色土 (10YR3/3) しまり・粘性ともにやや強。地山ロームブロックを少量含む。
- 2 黒褐色土 (10YR3/1) しまり・粘性ともにやや強。φ2~3mmの地山ローム粒・炭を多く含む。
- 3 黒色土 (10YR1.7/1) しまり・粘性ともにやや弱。地山ローム粒を少量含む。炭を密に含む。製炭層。

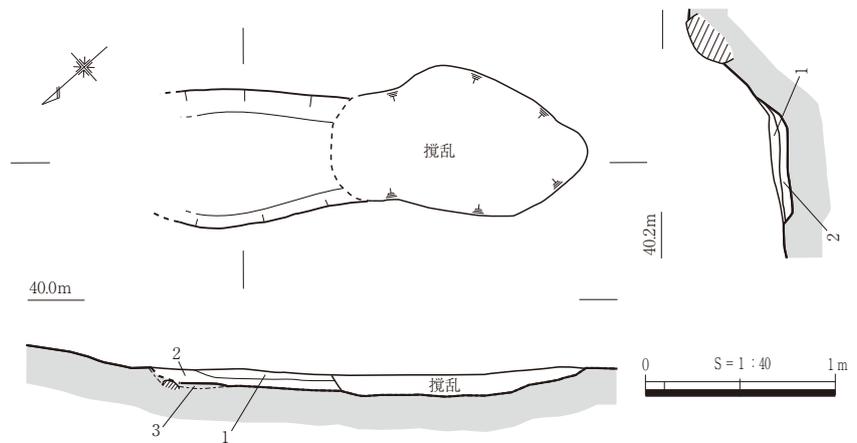
第128図 SK13

SK14(第129図、PL.30)

A区の北西寄り、E3グリッドの中央南寄りにあり、丘陵斜面から平坦面にかけての傾斜変換点付近、標高39.6mの地点に位置する。すぐ南側にはSK13がある。表土除去後のソフトローム二次堆積土中で検出した。遺構の南西側は攪乱によって壊されており、全体の形状を把握できなかった。

平面形は楕円形状と推定され、長軸0.96m以上、短軸0.72m、深さ10cmを測る。断面形は短軸方向で逆台形状を呈する。

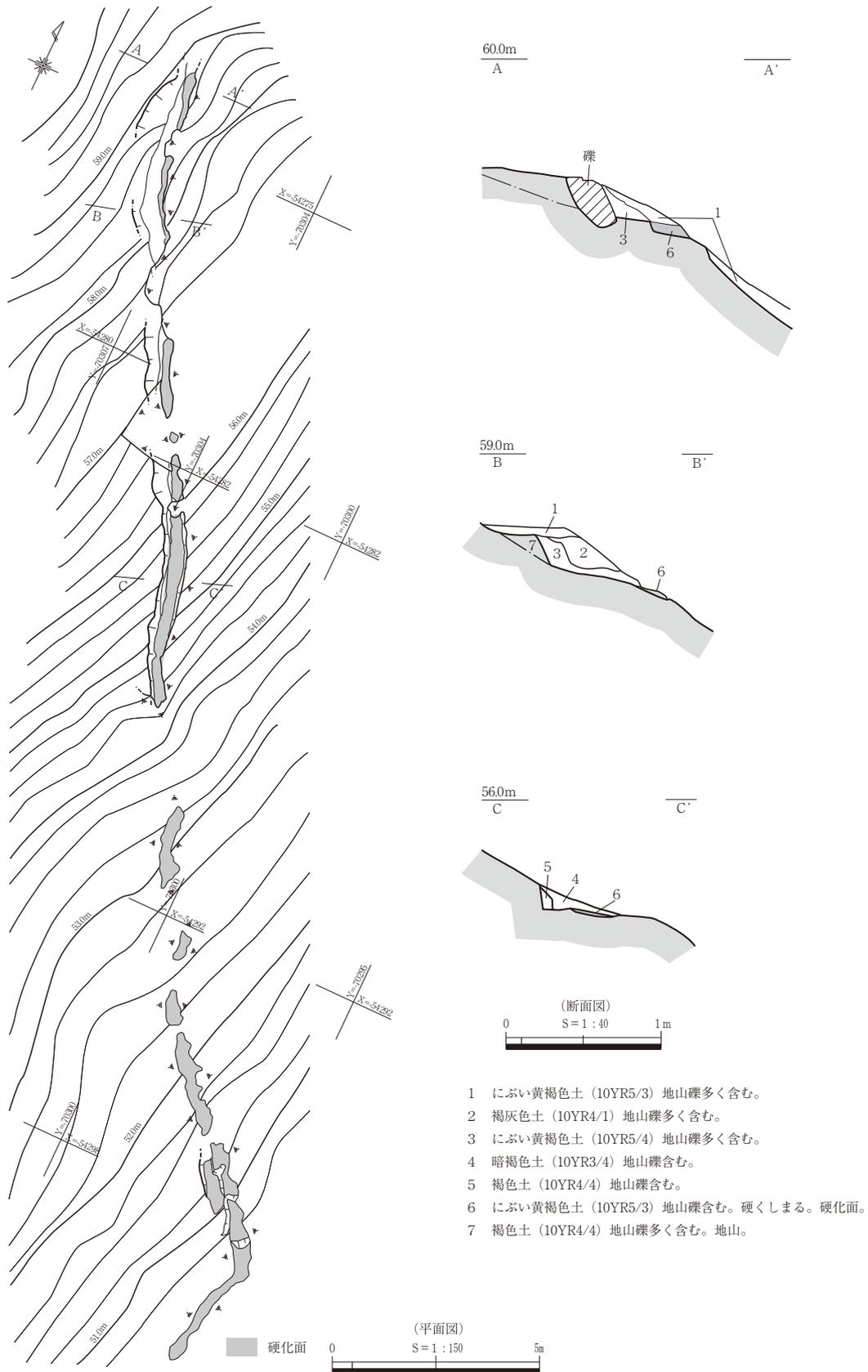
埋土は、黒褐色土と褐灰色土からなる2層に分けられ、自然堆積と考える。いずれの層にも炭粒を含んでおり、1



- 1 黒褐色土 (10YR3/1) しまりやや強、粘性やや弱。地山ローム粒を多く含む。炭を密に含む。
- 2 褐灰色土 (10YR4/1) しまりやや強、粘性やや弱。地山ローム粒・ロームブロック、炭を少量含む。
- 3 褐色土 (10YR4/4) しまり・粘性ともに強。基盤層。

第129図 SK14

第3章 調査成果



第130図 SX 1

層では密に含んでいた。焼土や被熱面等は確認できなかった。

埋土中から土器が出土しているが、小片のため図化できなかった。炭粒についても自然科学分析による年代測定に耐えうるものはなく、遺構の時期は不明である。

遺構の性格は判然とはしないが、埋土中から炭粒が多く出土することや周辺遺構との関係から、製炭に関わる土坑と考える。

3 道

SX 1 (第130図、PL.30)

C区中央から西側のD13、E13、F12・13、G12グリッドにあり、標高50.2~59.2mの急斜面に立地する。硬化面がC区斜面を斜めに走るもので、南東側はSX2の埋土上に形成される。表土除去後の斜面流土である明黄褐色土上面で検出した。

全長は35m以上で、斜面を幅0.4~0.7mにカットして平坦面を造り、底面に硬化面が形成される道路遺構である。硬化面の幅は0.08~0.42mを測る。南東側のF12グリッドでは南から3mは等高線に沿って形成されるが、そこから北西方向に斜面を斜め上方へ登るように形成され、さらに調査区外へ延びるものと思われる。

埋土は、1~3層に分層できた。いずれもしまりのない黄褐色系の埋土である。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、古代以降の道と考えられるSX2が完全に埋没してから造られていることから、当遺跡では新しい時期の遺構に含まれよう。硬化面が形成されていることから、道として造られたものと考えられる。

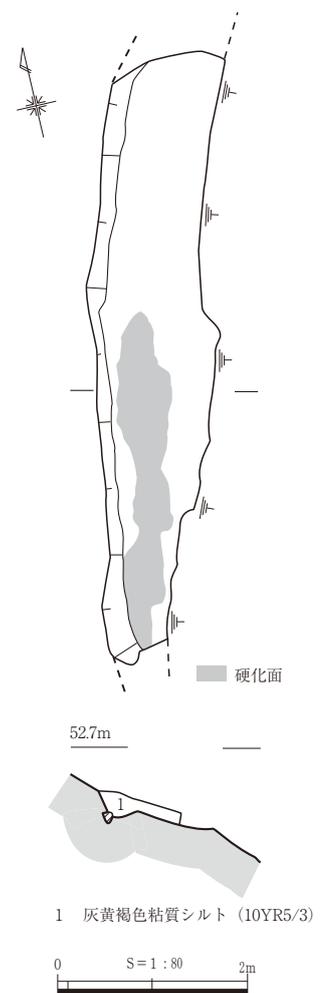
SX 3 (第131図、PL.30)

C区中央南側のG12グリッドにあり、標高51.4~52.3mの急斜面に立地する。東側約2.5m斜面下方にはSX2が平行して走る。標高約52m付近を等高線に沿ってほぼ直線的に形成される。

総延長6.3m以上、斜面を幅0.7~1.3mにカットして平坦面を造り、底面に硬化面が形成される道路遺構である。硬化面の幅は0.25~0.6mを測る。南北両端は流失したものと考えられる。

埋土は、灰黄褐色粘質シルト単層である。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。硬化面が形成されることから、道として作られたものと考えられ、SX1と同時に機能していた可能性がある。



第131図 SX3